

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

人生初の大冒険にわくわくしていた19歳の夏のあの日、私は友人4人と北海道の大地に自転車とともに降り立った。苫小牧フェリーターミナルを後にして、富川に向かった。北海道は右回りに回るらしいが私たちは左回りで出発した。最初の目的地の富川まではおよそ50kmとそう遠くはない。苫小牧市内を抜けると、信号も無くなり、交通量も減り、快適な道路となった。しばらく走ると、なぜみんなが北海道を走りたがるのか、1つ謎が解けた。道路の脇には牧場が広がっている。北海道に来たという実感をした。牛に挨拶すると、みんなが一斉にこっちを見てくるのが面白かった。

富川に到着して、宿泊予定のライダーハウスに行ってみるとまさかの定休日、この先のキャンプ場まではかなりの距離がある。初日から野宿かと考え、途方に暮れていたところに、親切なおじさんが現れた。話している内におじさんは大学生のときに北海道をバイクで回り、その良さに魅かれて移り住んだと知り、事情を話したところ、自宅に泊めてもらえることになった。自宅に行くと奥さんも快く迎えてくれた。奥さんが作った夕飯のカレーは本当に美味しかった。翌日は、朝食を食べて、奥さんにおにぎりも作ってもらい、出発した。宿がなく、途方に暮れていた私たちを、会った初日にも関わらず、自宅に泊めてくれたおじさんと奥さんには本当に感謝しかない。

2日目はおよそ140kmを走破した。新冠町に入ると、日高本線の鉄橋が見える。そこからは、海岸線に沿うようにアップダウンの連続で、風は向かい風だったが岬まで気合と根性で乗り切った。反対の広尾からだ、緩やかな上りだから、北海道は右回りをする人が多いのかと2つ目の謎が解けた。このときばかりは左回りを後悔した。岬からは下りになり、宿泊地の百人浜キャンプ場に向かった。そこには私たちの他にライダーが6人いた。3日目は彼らと一緒に出発したが、あっという間に姿が見えなくなった。キャンプ場から道道34号線に出て、日高山脈を左に見ながら快走した。山の中を走っていたが天気も良く、最高だった。しばらくすると釧路まで53kmとあり、山花公園キャンプ場に向かった。途中、道に迷ったが、某高専の自転車部に遭遇し、公園入口まで道案内してもらった。旅先での人の情けは本当に有難いものだとつくづく感じる旅は続くのだが、その話はまた次の機会にしよう。

この1か月半の旅のなかで、毎日が人と人との出会いだった。その出会いは本当に有難いものだった。初日に会った親切なおじさん、キャンプ場で出会ったたくさんのライダー、途中で出会った地元の人たち。出会った人たちが多すぎて、私たちは4人で旅をしたが、もっと大勢の人たちと旅をしていたのではないかと錯覚してしまう。旅行先で出会う人のほとんどは一期一会であるが、その一期一会の出会いを今でも鮮明に思い出すことができる。こんなに多くの人と日常生活の中で出会うことは滅多になく、出会ったことすら忘れていることもある。この出会いは余暇という特別な時間がもたらしたものなのだろう。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私は、今年の三月に東京の学生団体が主催するカンボジアの農村でソーシャルビジネスに挑戦するツアーに参加した。カンボジアでは、大都市であるプノンペンに滞在しているときは、同団体が支援している大学生のシェアハウスで彼らと生活を共にし、2泊3日で彼らの出身地の農村にホームステイをした。

私たちが訪れた農村は、あたり一面に田園風景が続き、2～3年前に出来た一本の道に沿って家が数メートルおきに建っていただけであった。井戸はこのメイン通り沿いに3つ、トイレのない家庭もあった。そして村にはマーケットもなく、到着した時は本当に「何もない」という印象を受けた。しかし、農村での生活は心地よく、陽気な人が多くプロジェクトを行っている時間以外はずっと現地の方と交流をしていた。

私は農村で生活していくなかで、子供たちをはじめ村の人たちにとって今後どのように発展していくのが良いのだろうか考えるようになった。例えば、工場が一つ建設されれば、安定した収入が得られ生活水準も向上するだろう。しかし、そこでは単純労働をさせられ、健康面に被害がでてくることもある。労働者の将来性を感じられなかった。農村には、物は何もなかったけれど、生活していくことは出来る。私が訪れた時は、ちょうど収穫期を終えたこともあって、人も時間もゆっくり流れており、家族がずっと一緒にいる環境が個人的にすごく好きだった。この生活が続いていくのが良いのではないかと思うときさえあった。しかし、実際、村の中にも格差があり、さらにマーケットがある隣の村に行けば、隣村が発展していることは一目瞭然だった。村の人達が発展を望むのは当たりまえかもしれない。現に、人々はお金持ちになることへの欲求が強かった。そして私が一番悲しいと感じたことが、彼らの将来の夢が、日系企業をはじめ、外資企業等の給料が良い環境で働くことだった。その先の考えがなかった。彼らにとって高い給料をもらい、家族に仕送りをすることが一番幸せであるとされていた。確かにそれは当然のことかもしれない。

今回の旅行をとおして、「彼らにとって何が幸せなのか」、「今後、どのような支援が大切なのか」を改めて考える機会となった。私は、以前まで国際協力の仕事に憧れていたこともあって、彼らの気持ちになって支援はできる、彼らの望むことをするべきだと考えていた。しかし、実際に現地を訪れてみると、彼らの気持ちに寄り添うことはできても、同じ気持ちになれず、その農村にとって、そこで暮らす人々にとって本当に必要なことすらわからなかった。そして、カンボジアに行けば何か見つかると思っていた安易な気持ちは打ち破れた。

カンボジアに旅行してから、5か月が過ぎた。4月からは以前から勉強したかった途上国支援について学んでいる。しかし、あの時の無力と感じた自分に未だ向き合えずいる。今後は、学内の勉強を続けるとともに、こうした課外活動にも参加し考えを深めていきたい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

春休み、母と二人でスペイン・パリ旅行をした。海外旅行は初めてではなかったが、この旅行では私にとって忘れられない旅行になった。観光をしただけなので、町の本当の姿や裏側までは見えていないと思うが、スペインは間違いなく私のなかで大きな意味を持つ国となった。その理由となる出来事を2つ紹介する。

一つ目は FC バルセロナの試合を観戦したことだ。FC バルセロナとは私が最も好きなサッカーチームの名前である。有名なメッシが所属している。その試合を見るためだけに旅行の日程を変更するほどこの観戦が今回私の中でメインだった。ずっと憧れてきたスタジアム（カンプノウ）に自分がいるなんて信じられなかった。テレビでしか見たことのなかった選手の表情がはっきりと見て取れる。J リーグの試合と比べるのはナンセンスかもしれないが、プレースピードが明らかに早く、選手がドリブルをしシュートをするたびに迫力を感じた。カンプノウは客席とピッチの距離がかなり近いので選手の気迫が直に伝わってくる気がした。席が前の方がったこともあって、私の周りは地元の若者でいっぱいだった。みんなお酒を片手に仲間たちと一緒に盛り上がっていた。スタジアムのセキュリティーは厳しいように感じたが、中に入ってしまうとみんな席番号など気にせずだんだん前の席へと移動してきていたのが印象的だった。サッカーが好きということ、見ているだけで笑顔になれるということ、地元の人々が一体になって盛り上がれるということ。こんなにも幸せな時間を提供してくれるサッカーはやはり私にとって特別なものと再確認した瞬間だった。

二つ目はスペインで一番有名といっても過言ではない、サグラダファミリアを見たことだ。サグラダファミリアはガウディという建築家を作っていた未完の世界遺産として知られている。私はサグラダファミリアをはじめとしてグエル公園やカサミラなどガウディが作った建築がとても好きで、高校生のころから、いつか行こうと思っていた。いつも写真で見ているからかもしれないが、サグラダファミリアを下から見上げた時よりも、遠くから見た時の方が、私のイメージに近かったので興奮した。しかし近くで見ると、それはそれでとてもよかった。細かい彫刻が一面に施されており、その一つ一つにストーリーがあった。今回の旅行はやりたいこと行きたいところがたくさんありすぎて日程が詰まっていたため一つの場所に時間はかけられなかったが、サグラダファミリアはずっと見入ってしまった。天気の良い日だったのでベンチに座って一日中見ていたいと思えた。

私はいま第二外国語でスペイン語を受講している。それを選んだ理由は FC バルセロナとガウディ建築のあるスペインに住みたいと直感的に感じていたからである。不純な理由だと恥ずかしく思っていたが、今回の旅行を通してその直感は間違っていなかった。さらにスペインに対する思いは強くなった。また訪れたいし、もっとスペインのことを知りたくなった。そしていつかスペインで生活したい。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

何をやっても長続きしない私の唯一の趣味は、ランニングである。中学生の時に地区の陸上競技大会の選手に選ばれてから、走る楽しさにどっぷりはまってしまった。800m や 1500m、駅伝などに出場し、当時は吹奏楽部に所属していたのに、夏は真っ黒に日焼けしていた。高校に進学すると顧問や先輩たちの雰囲気の良いもあり、すぐに陸上部に入部した。種目は中長距離。よく、友人に長距離走をやっていると言うと、「あんなに苦しいのが好きだなんて物好きだ」なんて言われる。もちろん、苦しくないわけではないのだが、その苦しさを超えてライバルに競り勝ったときや自己ベストのタイムを出せたときの格別の喜び、そして何よりあの爽快感が、また私を走らせるのである。

私は宮城県の出身だ。高校時代は、秋冬になると県内各地のロードレースに参加していた。その中でも、私にとって特別なマラソン大会がある。太平洋に臨む、宮城県亘理町の「鳥の海マラソン」だ。この大会は毎年 11 月に行われ、海に面した平坦なコースが走りやすいため県内外からたくさんの参加者が訪れる。亘理町は私の出身地の隣町なので、私にとっては毎年恒例の地元のマラソン大会で、高校で陸上部に入る前にも参加したことがあった。高校 2 年生のときには 10km 女子の部で優勝したこともある。優勝賞品に地元特産の鮭をまるごと一匹もらったことは今でも忘れられない。

ところが、私の故郷は、あの東日本大震災によって一変した。鳥の海は津波による甚大な被害を受け、従来のマラソンコースは無論走れる状態などではなく、高校生最後の鳥の海マラソンは開催されることがなかった。その後の私はといえば、宇都宮大学に進学して陸上部への入部も考えたが結局断念した。ときどき軽いジョギングをすることはあっても、部活で毎日のように走っていた生活からは遠ざかっていた。

そんなある日、鳥の海マラソンが「わたり復興マラソン」に名前を変えて開催されるという知らせが飛び込んだ。高校時代に毎日隣で走っていた相棒を誘い、すぐに申し込んだ。震災からわずか 1 年半での開催であった。相棒も私もすっかり陸上競技を引退し、脂ののったたるんだ体ではあったものの、10km を完走した。やはりあの爽快感は変わっていなかった。そして、昨年 11 月も相棒と 2 回目のわたり復興マラソンに出場した。余裕が出てきた私たちが選んだユニフォームは、スーパーマリオとルイージの仮装。大会一の注目の的となった。子どもたちや沿道で応援する地元の人たちから度々声をかけられ、手を振りながら、時には写真を撮りながら走る故郷には、たくさんの笑顔があった。完走後には、震災前から恒例の、地元の郷土料理である「はらこめし」と豚汁のサービスが参加者をさらに笑顔にする。被災地でのこの笑顔は、まさに復興の一步の表れであった。今では私自身の走る目標は、ライバルや自分に勝つことではなく、走ることを楽しむことである。わたり復興マラソンは、スポーツと地域活性化が融合した、被災地復興の象徴としてこれからも全国から多くの参加者を集めるだろう。私にとって年に一度の最高の余暇である。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私の心に残った余暇経験は馬に乗ることである。馬に乗るといってもただ馬の背に乗って馬を引いてもらう「引き馬」をするのではなく、自分で馬を操る「乗馬」のことである。私が宇都宮大学の馬術部の存在を知ったのは4月に宇都宮に来てからである。ちょうどアパートから大学までの通学途中に馬場があり、そこで馬が走っているのを見かけたのがきっかけであった。部員募集のチラシを友人から見せてもらった時、‘平日は月曜日を除いて朝5時半から練習’の文字にはじめは「えっ!？」と驚いたが、なんとかなるだろうという軽い気持ちで馬術部への入部を決めた。両親や友人からはもの好きだと言われたが、乗馬を今まで経験したことがなかったことや、新天地で新しいことに挑戦したかった気持ちもあり、入学してすぐに私の気持ちは勉強よりも馬術部のことでいっぱいになった。

馬術部に入部するとまずは馬房掃除や馬の手入れの仕方、乗馬で使う道具の名前、馬の名前など覚えることが山程あった。教えてもらうこと、経験することすべてが初めてのことばかりで、入部して4か月たとうとする今でも次々と新たな発見がある。特に私が驚いたのは馬の性格や体格のことである。入部当時は6頭いた馬の区別もつかず、みな同じに見えていたが、何度も世話をしたり、馬に乗ったりするうちに馬それぞれにはっきりとした性格や体格があることに気が付いた。例えば6頭のうち最年長の雌馬スティは部員からおばあちゃんと呼ばれ、その名の通り優しく温和な性格をしている。また年のせいかいつも眠そうな顔をしているが、走り出すと人一倍元気な馬である。他にもいたずら好きで人懐っこい性格の馬や、鏡の前で自分の姿をじっと見つめるナルシストで気性の激しいツンデレの性格をした馬など、人間のように馬にもそれぞれ性格があるのである。また、練習を見学している最中にも発見があった。はじめは馬が左右に歩いたり、障害物をジャンプしたりするのは訓練を受けているからであって、人はただ乗っているだけで馬が動いてくれているのだと思っていた。しかし、よく見てみると手綱や脚の使い方、時には掛け声で馬を誘導していたのである。手綱や脚の使い方も一通りだけでなく、自分が行きたい方向やしたい動作によって使い方が変わるということを先輩やコーチから教わり、乗馬の奥深さを知った。

また馬術部は馬に乗ったり、馬の世話をしたりするだけでなく、部費を稼ぐための「使役」という名のアルバイトの活動もある。最近では宇都宮市内の農家でトウモロコシ収穫を行った。農学部所属の部員がほとんどを占めるなか、農作業経験がゼロに近い私が役に立てるか不安であったが意外と楽しくトウモロコシ収穫をすることができた。今まで農家の人と交流がなかったため、朝早くからの収穫や販売までの手順など知らないことが沢山あった。自分がいかに農業という分野に無知だったのか実感したほかにも、自分たちが食べている野菜がひとつひとつ人によって育てられていることに感動した体験であった。このように、馬術部は私に驚きと興奮を与えるだけでなく、馬を扱うことから命の大切さを教えてくれる、今の自分にとってかけがえのない存在である。そして、馬との出会いは私の思い描いていた宇都宮での大学生活を180度変えるものであった。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私がこれまでにされたドッキリの中での一番は、間違いなく今年の3月にされた卒業旅行でのドッキリだろう。私は、宇都宮大学に編入学してくる前、山形の短大でスノーボードサークルに入っていた。山形大学工学部と合同のサークルで、私と同じ時期の卒業生は、山大の大学院生3人と4年生が1人、それから短大の同期2人で、私を含めて7人だった。そのサークルの卒業生メンバーで、岩手県の安比高原スキー場に行く二泊三日の卒業旅行を計画していた。

当日は、大学院生の先輩と4年生の先輩の車で夜の11時に山形から出発した。私は4年生の先輩の車に乗り、私たちは前を走る院生の先輩の車についていっていた。しかし、途中で気づいたのだが、向かっている方向がおかしい。それでも、前の車についていくしかないの、高速に乗り一回目の休憩で車を降りると、着いたのは栃木のパーキングエリアだった。もうこの時点で、岩手には行くはずがない。そこでもまだ目的地は知らされず、私が予想していたディズニーランドも通り過ぎた。私が乗っている車内では、もうこの先を行くと成田空港だから、北海道にボードしに行くんだ！と確信し盛り上がっていた。わいわい言いながら思っていた通り空港に到着。院生の先輩にどういふことか聞きに行くと、カバンから手作りのしおりを出された。そこには「ほんとうの卒業旅行 いいね沖縄」と書いてあった。それを見た瞬間、私たちは駐車場で大騒ぎ。まさかのボードもフェイクとは思ってもいなかった。飛行機のチケットはもう用意されており、「はい、あと40分後に飛ぶよ。」と言われ、沖縄に行くんだという実感が沸かぬ間に、荷物を預けたりしていたらあっという間に搭乗時間。寝不足だったのでみんな爆睡で、気づいたら沖縄に着いていた。

那覇空港に着いてからレンタカーを借り、まずは首里城に向かった。もともと雪山に行く予定だったので、服装はもちろん長袖長ズボン。しかも、ズボンはスウェットやジャージ。院生の先輩たちは成田空港で持ってきていたアロハシャツにさっさと着替えていたが、残りのみんなは半袖を持ってきたはずもなく、服を買う時間もなかったのもそのまま沖縄に向かうしかなかったのだ。思っていた通り、沖縄に着いてから周りを見ると薄着の人ばかりで、本当に恥ずかしかった。周りの人にどう思われていたのだろう。着いてしばらくは服装が暑いし恥ずかしかったが、首里城を歩いているうちにみんな吹っ切れていた。二日間で美ら海水族館や国際通りに行ったり、沖縄料理を食べたりビーチで遊んだり色々したが、何をするにも楽しくて仕方がなかった。

旅行を終えて、しっかり準備していなくても意外と沖縄に行けてしまうものだなと思った。これを超える弾丸旅行はそうそうないだろう。あるとしたら海外かなと思ったが、パスポートを用意しておいてと言われた時点で怪しんでしまうだろうし。騙されて悔しかったが、最高の思い出ができた。忙しい中こんなに完璧なドッキリの計画を立ててくれた先輩に感謝している。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私はよく、自分の気持ちが向いたときに一人で電車で飛び乗り、高校時代の友人に会いに東京へ行く。先日、その東京である新鮮な体験をした。

渋谷駅で友人と待ち合わせをしていたのだが、休日ということもあり駅の中は多くの人で溢れかえり、私はせわしない人の流れにやっとのことで付いていっていた。慣れない駅の中で道に迷うまいと掲示板を見上げた私は、隣を歩いていた 30 代くらいの女性の靴に自分の足が引っかかり、躓いてしまったのだ。急な出来事で驚いたが、とりあえず私はその女性に向かって「すみません。大丈夫ですか。」と声をかけ、謝罪した。ところがどうだろう。その女性は私の顔を見てあからさまに嫌な顔をし、舌打ちをして歩き出したのだ。私は驚いて女性が歩いていくのをただ見つめていた。その女性は数メートル進むと再び自分の足元を見て振り返り、私を睨みつけた。その場で起こった出来事を整理するためにただ立ち止まるばかりの私をものともせず、人の流れは急速に進んでいた。

宇都宮や自分の地元の青森ではこのような経験をしたことはなかったため、確かにその時の女性の対応には非常にショックを受け、今でもあの時の悲しさと恐怖は忘れることはできない。東京は冷たい都市だとよく聞く。時間の流れが急速で、そこに身を置いている人々に情味を感じることは難しいということなのだ。しかしながら、今回の出来事は私にとってとても新鮮で、東京という場所を見つめなおすきっかけとなった。このようなことが起こるのは必ずしも東京に限ったことではない。しかし、東京は政治や経済、流行の中心地であり、そこには夢や目的を抱いた多くの人がいるのだ。非情ともいえる環境に身を置き、急速な時間の中で生活することを覚悟の上でも、わざわざそこに集まりたいと思わせる魅力が東京にはあるのであろう。それを汲み取った例が東京オリンピックの開催だと私は思う。東京が世界の中でも様々な性格を踏まえた上で評価され、世界中の人々の注目を集める対象としてふさわしいと認められたのだ。

東京は実におもしろい場所である。いかにも中心地らしい冷たい性格を持ちながらも、切っても切り離せないと感じさせる魅力がそこにはあるのだ。それはそこに人々の志が溢れているからであろう。私自身もある意味、東京の思う壺である。東京の性格を深く考える経験をさせられ、東京に対するより一層の興味を抱き、その虜となってしまったからだ。私はいつか、自分の心の中に抱いている夢を東京という場所で叶えたいと願っている。たとえそこで自分の靴を踏んだと怒りをぶつけてこられたとしても、東京で渦巻いている流れの中に自分の夢も加えてみたい。そしてまた私は、新たな東京の性格に触れ合うために、近いうちに東京に行ってみようと計画している。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

甲子園とは、全国の高校球児たちのあこがれの聖地であり、また観客の心を引きつけてやまない場所である。

私は、中学生のころから姉と漫画の影響で高校野球ファンであった。姉は高校生時代に高校が県予選決勝まで進んだこと、また私も中学生時代に中学校の野球部が全国大会に出場し、よく応援したという経験もあって、野球が好きだった。毎年甲子園中継を観て楽しんでいた。中学生の頃から実際に甲子園球場に行って観戦したいと思っていたが、私の地元秋田から兵庫の西宮市まではもちろん遠く、中高生時代には行く術を持っていなかった。残念ながら、自分の高校が出場することもなかった。一足先に甲子園観戦を実現した姉の話を聞いて、うらやましく思っていた。

そして、大学生になった昨年、ようやくその夢を叶えることができたのである。北海道に進学した野球好きの友人がなんと誘いに乗ってくれ、一緒に大宮から夜行バスに乗り、8月11日に大阪駅に到着した。それから電車で15分、すぐ甲子園駅に到着した。甲子園駅を降りると、甲子園球場が大きく見え、応援の音楽や声が聞こえてきた。3塁側スタンドに入ると、そこはもう、テレビ中継で見ていた高校野球の世界だった。日曜日だったため、席は混んでいたが、関西弁の2人の方々が隣の席を案内してくれた。話を聞くと、兵庫県代表の自分たちの母校が試合をするから応援に来た、とおっしゃっていた。私たちは3試合を観戦、お昼には甲子園名物・甲子園カレーを食べた。炎天下の中で熱中症になりかけたり、地元・兵庫代表の西脇工業のものすごい応援に混じってみたり、とにかく一日じゅう甲子園を満喫した。それから夜には大阪駅に戻り、夜行バスに乗った。行ったのは「甲子園のみ」という弾丸旅行だった。

憧れの甲子園での観戦を実現して、いちばんに感じたことはやはり「生で見る、感じる臨場感」だ。夏休み中に家で涼みながら中継を観て、一喜一憂する楽しさもある。しかし、甲子園球場に足を運べば、実際の球場の暑さ、間近で聞く応援団の声援、そして何よりも高校球児たちのプレーにかかる熱さを、身をもって感じるができる。テレビ中継のように、投手が投げる球を定点からきれいに見ることはできないし、実況と解説の声も入らない。それでも、やはりあの臨場感を楽しむには、生観戦しかないように感じる。

これは他のスポーツや演劇、芸術にもいえることである。野球に限らず、さまざまなスポーツを生で見れば、その迫力と臨場感に圧倒される。舞台やライブなどにおいてもそれは当てはまるのではないか。そのように考えていると、以前の余暇政策論の授業で扱った新聞での、美輪明宏さんの話を思い出した。美輪さんも文化には生で触れるのがいちばんだとおっしゃっていたはずだ。デジタルな環境が充実している現代でも、スポーツをはじめ、さまざまなものに生で触れるという行為がずっと残ってほしいと考える。

そして、私は今年の夏も甲子園球場に生観戦に行く予定だ。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

心に残った余暇経験といえば、思い浮かぶのは1つしかないと言ってもいいほど思い入れのあるものがある。ご飯を食べたり、お風呂に入ったり、寝たりするのと同じような感覚で、生きていく上で無ければならないと思っていたくらい大切だったもの、それは「Hula」である。私の中学、高校時代の余暇はほとんどが Hula で埋まっていたといっても過言ではない。寧ろ、Hula をしていた記憶しかないのである。

Hula とはハワイの伝統舞踊である。手の動き1つ1つに意味があり、踊ることで愛や幸せ、自然、生活の様子などを表現する。日本では映画「フラガール」の影響で爆発的に人気となった。私が Hula の魅力に気づいてしまったのは2008年7月23日、映画「フラガール」のモデルである福島県いわき市の「スパリゾートハワイアンズ」でショーを観た、中学2年生のころだ。ショーを観たのは初めてではなかったのに、その時はなぜか初めて観たような衝撃であった。今でも当時の感情は鮮明に覚えており、決して忘れることはない。フラガールになりたいとプロのダンサーになることを志したのもこの時である。

心に残った余暇経験ではあるが、余暇さえあれば当たり前のように踊っていた Hula であるから、改めて文章にするのは難しいように感じる。中学生の頃から教室に通い始め、学校が終わったあと電車に乗り、隣の市まで1人通っていた日々は懐かしい。高校進学の際には、教室に通いやすいところの学校を選んだ。プロのダンサーを目指していたから踊るというよりは、ただ単に Hula の魅力にはまり、踊りたいという気持ちが抑えられなかったからだと思う。学校が終わって家に帰り、晩御飯を食べ終えたあと夜中1時まで踊り続けるのももう当たり前のことであった。また私が高校1年生の時から高校生対象の Hula の大会「フラガールズ甲子園」が始まり、学校の先生方を説得して出場権を得て友達を誘い、3年間大会に向けてほぼ毎日練習をした。同級生の友達をはじめ、1つ下の後輩、2つ下の後輩に踊り方を1から教え、休日にも朝早くから電車に乗り、練習場で9時から16時まで友達と練習、さらに帰宅後も1人で踊る。テスト期間でさえ踊らなかったことはない。地元テレビへの出演も多く、さらには代表として広島県へ行き PR のために踊ったこともあった。全ては Hula がもたらしてくれた経験、出会いだと今でも感じている。余暇はほぼ全て練習に使っていたため、テレビなどもほとんど観なかったこともあり、流行について行けなかったこともある。遊んだ記憶より踊った記憶。もう少し遊んでおけばよかったと思うこともたまにある。しかしこの余暇経験に後悔は全くない。この余暇こそ私が最も輝いていた時だと自信を持って言える。

プロのダンサーになるための就職試験には結局失敗して今ここ宇都宮大学にいる訳だが、私はこれでよかったのだと感じている。以前より踊ることは少なくなったが、大学は楽しいし、余暇を見つけて Hula を自由に踊ることができる環境にある。Hula は私の余暇にとって大切なものである。恐らく今後も Hula と離れることはないだろう。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

筋肉トレーニングとランニングの後、汗だらけの体をシャワーで洗い、扇風機から発せられる風が心地よく肌を滑る——。まさにこの瞬間こそ、私にとって極上の余暇空間となる。きれいに整理された一部屋にぽつんと扇風機があり、足裏にさらさらとカーペットの感触が抵抗なく伝わってくる。思わず充実感と幸福感が入り混じったような形容しがたい感覚を覚えるが、そのとききっと脳では何とかという物質が出ているのだろう。こうした空間に出会うのは半年前から週三日と決めていて、それが良いあんばいだと気が付いた。一日または二日をはさんで無理せず行っていくのが私は好きだ。ところで、この暇を持て余した至福のひとつときには二つのことをしている。食べることと見ることだ。

運動の後にはできるだけ早く食事、特にタンパク質を多く取ったほうがいいと大学で学んだ。ややきつめの運動の後には筋組織が破壊されているため、もりもり食べて栄養を補給した方が良いとのことだ。そうすると、俄然楽しくなってくる。なぜなら、ごはんを好きなだけ食べても腹回りを気にすることがなくなるからだ。運動後の食事はたくさん食べる必要があるのだと言い聞かせることで、次の一杯に悩んだりはしなくなった。これが余暇を経験する上で非常に重要な点だとみている。つまり、悩むことがない状態のことを指す。食べる際に迷いが無いことは、より一層そのときを心に残る余暇たらしめているのだ。

しかし、一心不乱に食べているときは少ない。たいていはPCで何かを見ながら食事をする。映画やお笑い芸人“さまぁ〜ず”の動画、NBA 関連の動画を見ていることが多いと思う。特に、NBA 関連の動画は数分であっても必ず見る。好きなチームのブログがあるので、そのサイトをチェックし試合のハイライトや素晴らしいプレーを眺める。何回も巻き戻しをしては感嘆しの繰り返しになることもしょっちゅうある。なぜこれほどまでにNBA が好きなのだろうと自問してみると、理屈ではなくただ感情的、感覚的な気持ちに落ち着く。バスケットボールが好きで、世界最高峰のリーグで繰り広げられる多様なプレーに惹かれたのだ。おそらく映画や“さまぁ〜ず”、NBA にせよ、今は完全に余暇の時間なんだという確信が自分の中にあることで、それらは心に残る余暇を構成しているのだろう。

心に残った余暇経験といえば旅行やイベントなどが思いつきがちであるが、私の場合この余暇空間の経験こそが心に残る余暇となり、日常的ゆえに私にとっては“やみつき”な余暇経験なのである。以上のように見てくると、どうやら私の余暇を一言でいうと、すっきりした状態で、したいことをしている時間だと思う。考えるべきことが多く存在している時期だからこそ、頭を休ませる時間が心に残るのかもしれない。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

会場いっぱいに鳴り響く拍手と、ブラボーの声。ステージ上に立った私はなんともいえないような充足感で満たされていた。つい先日の、第 77 回宇都宮大学管弦楽団定期演奏会でのことである。私は大学に入学してから管弦楽団へ入団しトランペットを演奏している。トランペットは小学校 5 年生からはじめて、今年で 10 年目になる。人生の半分をトランペットと共に過ごしてきたのだから、トランペットを吹くこと、音楽を演奏することはもはや私の生活の一部になりつつある。

ところで、「余暇」という言葉を辞書で引いてみると、余った暇な時間、仕事の合間などの自由に使える時間、とある。学生の仕事が学業であるとすれば、まさしく音楽を演奏することは私なりの「余暇」なのである。プロの演奏家であれば、彼らの音楽活動は仕事となり余暇では無い。しかし、アマチュアバンドで活動している私たちは仕事の合間に練習を行い娯楽としての音楽を楽しんでいる。音楽を演奏することを楽しみ、そしてそれを聴いてくれる人を楽しませるために日々練習に励むのだ。

一方で、私自身も他の団体の演奏会を聴きに行くことが多々ある。プロの演奏会に行く機会も多いが、アマチュア団体の演奏を聴く機会も少なくない。演奏を聴くこともまた、自分の中での余暇活動なのだ。つまりは、演奏会に足を運んでくれるお客様というのは、彼らの「余暇」のために聴きに來ているのだ。そこで私は思った。自分の演奏会において、自分の余暇活動が他人への余暇の提供になっているのではないかと。私が仕事ではなく好きでやっていることが、誰かの余暇となっていること。それに気づいたとき、あの充足感の正体が分かった。好きなことが他人の好きなことになっていることほど嬉しいことはない。練習する中では、楽しいことばかりではないし、むしろ苦しいことのほうが多く、何度涙したか分からない。しかしそれでも続けられるのはきっと、人に私の音楽、自分の好きなことを楽しんでもらいたいという気持ちがあるからなのだろう。演奏が終わり、会場中に響き渡る盛大な拍手と「ブラボー！」の声で、今までの辛さや苦しさは洗い流され、救われたような気持ちになるのだ。だから、いつまでたっても音楽はやめられない。

また、このような感じ方ができるのは自分がアマチュア団体で活動しているからこそ得られる感覚なのかもしれない。音楽に関わらず仕事であれば人を楽しませることに義務感が付きまってしまうが、アマチュアであれば自分が好きなことをしていて、それを他人が楽しんでもくれるのだ。今回のこの演奏会は私にとって、どうして自分は音楽を続けているのか、という根本的な問いに対して一種の答えを導いてくれる心に残る演奏会だった。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私には他の国際学部の方々のような海外での貴重な体験もなければ、特に傾倒している趣味もない。強いてあげるとすれば、私はディズニーが好きである。そこで私は今回、私が最もディズニーを素晴らしいと思った日の話をしたいと思う。

それは、2月13日に行われたディズニー謎解きプログラムである。これは1月19日、2月6日、2月13日の3日間限定で行われ、抽選でチケットを手に入れた1日およそ1000人だけが参加できる、閉園後のディズニーランドを舞台に高難易度の謎を解いていくというものだ。チケット応募時に2問問題が出されるのだがなかなか難しく、しかしこの正答率によって当選確率変動するというので、友人と二人で頭を捻らせた。これが功を奏し、後日見事に当選確定の知らせが届いた。これは後に知ったのだが、10万人近くの応募があったらしく、この高倍率の中当選した自分の幸運に感謝したい。

この日は閉園時間が通常よりも早かったが、昼間は通常通りパークを楽しめるということで、夜に余力を残すため、長時間並ぶアトラクションには乗らずに、比較的ゆつたりと過ごした。普段はしないのだが、この日は心に余裕もあり、キャラクターと写真を撮ったりもした。夜が近づくにつれてはやる気持ちを抑えきれなかったのを覚えている。

閉園後、午後8時半、集合時間からだいぶ時間もたって、自分たちも周りにも苛立ちが見え始めた頃、アナウンスが流れた。始まりの合図かと思ったが、単に閉園のアナウンスで、会場は笑いに包まれた。

「東京ディズニーランドは閉園時間となりました。またお越しいただける日を…」

「楽しみに待っているよ！あーはっはっは！」

突如ディズニー最強の悪役、魔女マレフィセントの声が鳴り響き会場からは歓声が沸き起こった。謎解きプログラムの始まりである。その後3人の妖精の魔法によって、事前に渡された封筒を開けた瞬間から一時間マレフィセントが眠りにつき、その間に静かに走らず謎を解き切らねばならないことなど、安全を何より重視し、徹底したディズニー特有の夢のある説明を受け、ついに謎解きが始まった。一時間最大限に頭を使って、普段より暗く、キャストからも笑顔が消え、BGMも不気味なパーク内を歩き回り謎を解いていったが、最後の問題がどうしても解けず時間切れとなってしまった。

答え合わせ終了後、30周年限定のコスチュームを着たミッキーたちが登場し、フィナーレを迎えた会場にはたくさんの笑顔と感動で満ち溢れていたように思う。バルーンを持ち、笑顔のキャストの方々と帰り際にハイタッチしたのも、その日は何もかもが特別な1日となった。これまで本当に多くの人々に夢を与えてきたウォルトディズニーの偉大さと、その精神を受け継ぎこれからも感動を与え続けるオリエンタルランドという企業の大きさを改めて感じた余暇経験であった。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私は今回、昨年の夏休みの余暇体験について書こうと思う。大学に入って初めて約2か月という長期の休みに入り、そのなかでたくさんの楽しい経験があったが、特に、地元新潟に帰省した時の経験について書いていきたい。話は遡るが、私は高校2年生のとき社会科の授業で地理を選択していた。クラスの関係上、文系コースの中で地理を選択している生徒が少なかったため少人数で授業が行われており、その分比較的生徒と教師の仲が良かった。そのつながりは卒業後も続いており、昨年の夏の帰省中、特に先生と仲の良かった私の友人から、「高校の時の地理の先生が巡検に連れて行ってくれるらしいが、一緒に来ないか。」という誘いがあった。「巡検」というのは(使う状況によっては違う意味もあるらしいが)、地理学においては実地調査や現地調査を意味する言葉である。だが、今回の巡検は調査というような本格的なものではなく、単に授業で扱っていたような地理的に少し特徴のある場所に実際に行ってみよう!という趣旨のものである。そこで私は、高校時代に地理の授業を選択していた友人3人と先生の計5人で巡検に出掛けた。

集合して車に乗った後、先生が言ったのは「どこへ行きたい?」の一言だった。私はすでに行先が決まっているものだと思っていたので少し驚いたが、先生の提案では秋田か仙台、日帰りで帰ってこられる距離だったらどちらでもいいとのことだったので、私たちは秋田に向かうことにした。私の地元は新潟県新潟市で、細長い形をしている新潟県の北部に位置している。秋田に向かうには新潟をさらに北上して山形を経由していくことになる。車で向かう道中、何か所かの寄り道をしたこともとても印象に残っている。新潟県内ではあっても、なかなか行く機会のなかった笹川流れ(新潟では有名な海岸の1つ)に立ち寄った。その日は天候に恵まれていたこともあり、快晴な空のもと透明度の高い海がより美しく見え、今まで知らなかった地元県の魅力を改めて発見できたように思えた。時間の関係で山形県には長く滞在することができなかったが、地理の先生が各県・地域の特徴などを少し教えてくれながらの移動は、景色がまた変わって見えて興味深いものであった。

私たちが最終的に向かったのは、秋田県の大潟というところである。厳密にいうと1か所ではないのだが、大潟は日本で唯一、地図上で経線と緯線が交わる地点なのである。ちょうど該当するポイントには交差点ということを示す碑が立っており、そこで記念写真を撮って今回の巡検の旅を終えた。この巡検の中では、特に調査をするなどの大きな目的があったわけではなかったが、高校時代に座学で受けていた地理の授業とはまたかなり違った魅力があって、とても有意義な時間を過ごすことができたと思った。地図の上では見えない現地の状況や美しさを実際に見に行くことの良さを知ることのできた、とても素敵な余暇体験だったと思う。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

私が二十年生きてきた中で本気で自分の人生に向き合ったのは、おそらく高校三年生の一年間だろう。卒業後の進路を考えてどうしても学力をあげる必要のあった私は、生活のほとんどの時間を勉強に費やした。私はこの一年間を勉強に打ち込むによって、初めて自分の力で人生の一部を切り開いたという達成感を得た。しかし、この経験は自分の努力だけで実ったことではない。家族をはじめとした周りの人たちが精神的な大きな支えとなったということは言うまでもない。

特に受験期の私を支えてくれたのは、祖父母の存在である。受験生の勉強にとって必要なこととして、リラックスすることが挙げられると思う。私はいつも学校の同じ場所で勉強していたため、祖父母の家で勉強することが良い気分転換になったことを覚えている。祖父母の家で勉強することがリラックスにつながる理由は、勉強した後に祖父母が作ってくれるご飯と一緒に食べることができたからである。事前に食べたいものを電話で聞いてくれて、勉強している最中に支度をしてくれるのである。私は勉強しているときに聞こえてくる、野菜を刻む包丁の音や揚げ物をカラカラと上げる音、魚が焼きあがる香ばしい匂いなど、耳と鼻で食事の支度を楽しみながら勉強を頑張った。勉強が終わると一つのテーブルを三人で囲んで食事をとった。祖父母の家では決まってテレビはNHKがかけられていたので、大相撲の取り組みを見ながら食べることが多かったように思う。大相撲が終わるとニュースが始まり、アナウンサーが読み上げるニュースについてそれぞれが自分の意見を述べるということもしていた。食事が終わると祖母が冷蔵庫から寒天を出してくれて、これも三人で食べることがいつもの流れであった。ニッキのピリ辛さが効いた寒天は、今でもお盆やお正月に祖父母の家へ行ったときには必ずと言っていいほど口にして、受験期の大変だった努力を懐かしんでいる。

高校三年生の一年間の真剣な受験勉強を終えて、なんとか大学に入学することができた今、大学の授業を始めアルバイトや自分の趣味のために時間を使う毎日を過ごしている。あのときの必死の努力が自分を作っていると考えると、ますます頑張らなければならないという思いが込み上げてくる。アルバイトを始めたことによって自分でお金を得ることができるようになったので、今度は私が祖父母を食事に招待して新たな余暇経験を一緒に出来たら、祖父母はもちろん、僕も幸せだと思う。いつもは祖父の運転する車に祖母と一緒に乗っているだけだったが、いよいよ私がドライバーになる番だ。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出15本!!

心に残った私の余暇体験といえば、中学2年生の夏休みに行った電車での大移動である。JRの青春18切符を使い、私の故郷である新潟県糸魚川市から宮城県の気仙沼市まで約14時間をかけて移動した。今までの人生で、1番電車に乗っていた時間を記録している日である。

事の発端は、私が従姉妹に会いたいと両親に話したことである。従姉妹とは距離があるため、なかなか会うことができない。そこで、せっかくの夏休みを利用しない手はないと思い、家族で宮城に行こうと相談した。しかし、私の両親は忙しいと言い、行くならお前1人で行ってこいとのことだった。1人で行くのは不安だったため、兄に相談したが面倒くさいと断られ、自分より4歳も年下の妹と一緒にいくという選択肢もありえなかった。そのため、1人で宮城まで行くことに決定したが、最初は新幹線で移動するものと思っていた。しかし両親は、せっかく夏休みで青春18切符があるのだから鈍行で旅を楽しんできなさいと言い、その切符の代金分を渡してきた。可愛い子には旅をさせろとの考えなのだろうか。しかし、そのときの私は宮城まで電車で行ったこともなかったし、鈍行列車による乗り換えにも不安があった。(私の記憶では結局乗り換えは8回あった。) また、もし乗り換えを失敗したときは夜をどう過ごせばいいのかという不安があった。14歳が1人でどこかに宿泊するのは難儀なことである。両親は、野宿は警察に見つからないようにしなさいと言ってきた。なんて親だと思った。

出発当日は、朝の六時ぐらいの電車に乗ったはずだ。始発か、その次の電車である。不安は大いにあったが、少しの楽しみもあった。やはり知らない土地に行くことはワクワクする。電車に長く乗っていると、少し周りを見る余裕も出てくる。長岡駅で乗り換え待ちのため1時間くらい足止めをくらっているとき、大人の多くもニンテンドーDSやPSPという携帯ゲーム機で遊んでいることに気付いた。大人の人でもこんな場所でゲームをするのかとぼんやり思った。今は誰もがスマートフォンをそこら中でかまっている光景に慣れてしまったが、その当時はそうしたことが新鮮だった。他のどこかの土地では、浴衣を着た人たちがたくさん乗ってくる区間があった。その近くでお祭や、花火大会があったのかもしれない。もし興味があるものに会ったとき、時間さえあれば見知らぬ町でもいつでも降りることができるというのが青春18切符の旅の魅力だなと思った。到着間際には漫画のような喧嘩の場面に巻き込まれそうになったりする場面もあるなど、緊張が解けない長い1日だったが結局は無事に終えることができた。

この日の鈍行電車による旅はとても刺激的なものであったし、多くのことを感じた。このエッセイを書くにあたって、当時のことを振り返ってみたが今でも新鮮な気持ちになる。やはり旅はいいものだとは再認識した。またこの旅のおかげで、今では長時間の電車での移動も苦にならなくなった。その点でもいい経験になったのではないかと思う。